

鈴木鎮一先生の面影を偲んで

社団法人 才能教育研究会会長 中嶋 嶺 雄 (国際社会学者)

松本市は現在、岳都・学都・楽都という三つの「がく」をキャッチコピーにしている、他の都市では追従できないユニークさを誇っている。その「楽」において世界的な音楽教育家の鈴木先生が松本市に残された功績は絶大だといえよう。

私自身は終戦直後の昭和二十二(一九四七)年一月、雪の残る東町の角を曲がって、裏町(下横田町)の木造二階建ての松本音楽院へ母と一緒にいき、鈴木先生から早速レッスンを受けた。源池小学校四年生のときである。先生はレッスンの合間にもよくタバコ(キャメル)を吸われていたが、指を取って教える姿は名医が患者さんを診るようで、実に細やかな指導をしてくださった。

こちらがあまり練習せずにレッスンに臨むと、たちどころに見抜かれてしまい、「嶺雄君、ヴァイオリンは一日弾かないと二日後退しますよ」と言われたことが、私個人としては、先生の言葉の中で最も強い印象として残っている。この言葉は、単にヴァイオリンの練習に必要な教訓であるばかりか、毎日コンスタントに勉強を続ける



第32回 スズキ・メソード夏期学校でのグループレッスン (1981年)

ことがいかに重要かを教えているという意味で、まさに教育の原点であるう。

その鈴木先生は、スズキ・メソッドの特徴である子供たちの「斉奏」のみならず、アンサンブル(合奏)にも強い関心を示されていて、素晴らしい演奏会がこの松本の地ですでに開かれていた。世は朝鮮戦争の激動のさなかにあつた昭和二十六(一九五二)年八月二十八日夜、信大文理学部講堂で鈴木先生が燕尾服姿で松本弦楽団を指揮され、まだ童顔の残る豊田耕兒さんの独奏でモーツァルトのヴァイオリン協奏曲第五番が演奏された。夏の信州の夜のひとときは、すでに楽都としての足跡をこのようにしっかりと刻んでいたのであつた。

その夜の鈴木先生は、いささか緊張しつつも、本当に嬉しそうに豊田少年の肩をたたいて、拍手に応えていた。こんな場面が戦後の松本にはもうあつたのである。



第35回 スズキ・メソード夏期学校 (1984年)